

世界展開力強化事業長期派遣メキシコ派遣 5 期 帰国報告書
チャピngo自治大学 UACH

農業開発学科
吉田 優介

● はじめに

私がメキシコに留学を決めた主な理由は、学生時代に自分の誇れる経験を持ちたかったからである。つまり自分の生きていく活力になるものを作りたかった。また 2018 年度の世界展開力強化事業のメキシコ短期留学に参加したこともあり、その学びを継続したかったのも 1 つの理由である。勉強、生活、旅行、インターンシップの項目で、2019/8/26 から 2020/2/20 の留学で経験したこと、感じたことを以下に記述する。

● 学科授業編

私が留学していた大学はチャピngo自治大学というメキシコ国内で最も大きい農業大学で、農分野が網羅されている。そこで私は Agroecologia、(農業環境学科) に所属し、2 つの授業を受講した。Manejo de Ecotecnologias と Agua Agroecosistema である。前者は、農村が抱えている環境面での課題に着目し、農村社会の発展を考えることが目的の講義である。この講義は座学と実習が半分ずつあった。座学ではメキシコの農村や留学生の母国(コロンビア、ペルー、日本)の現状の共有および講義、メキシコの農村に提案するプロジェクトのグループワークであった。実習ではバイオガスダイジェスターとウッドストーブの作製をした。バイオガスダイジェスターとは、家畜からでた糞を発酵させることによってガスを発生させる装置である。また、ウッドストーブはカーボンニュートラルのシステムを利用した装置である。講義をする教授がこの装置の研究をしており、私が短期留学の時に最も興味を持ったので受けることができ、光栄だった。メキシコの農村は、電波や電気、水などが届かないところも多くあり、標高が高いためそれらを運搬することも難しい。メキシコだけでなく似た状況下に置かれている国にも活用できる内容を扱う授業であったため、とても充実し、大切な知識を得られた半期となった。後者は、生物学、物理学を通して農業に与える影響や農業環境の問題点と解決策を紐解く授業であった。実習は無かったが、授業で学んだことや与えられたテーマをまとめて発表するなど、グループワークが主流の授業であった。メキシコに限らず海外の大学は、学生が単に先生の授業を聞くだけではなく分からないことをその場で聞いたり、その話から派生してディスカッションが始まったりするような授業スタイルである。チャピngoの学生はとても真面目なので、刺激を受けた。授業はもちろんスペイン語で進められていたが、スペイン語初級の私には完全に理解することはできなかった。少しでも理解するために、授業のノートを取り分からない単語をすべて調べる。こ



図 1:研修旅行

れだけでは全然理解できなかつたので次にやったことは、「聞く」である。私にとってはすごく苦手なことであった。分からないところは聞くという心がけをしたこともあって、目標であった単位を達成することができた。

● スペイン語習得編

長期留学の目標の1つは、スペイン語習得であった。しかし、残念ながら大学の語学センターでスペイン語の授業は用意されていなかった。そこで私は日本語の先生をお願いをして、日本語の学生のサポートをする代わりにスペイン語を学ぶ機会を設けていただいた。日本語を学ぶ学生は私が想像していたより多くいたことに驚いた。また、日本語を学んでいる学生は英語が堪能な学生が多かった。スペイン語を話せない私にとって、英語が話せる学生はとても貴重で助けになった。日本語の学生は日本の文化や伝統に興味があるので、よく質問された。重箱の隅を突くような質問もたくさんされたので、日本人として、もっと日本のことを知っておかなければならないと感じた。日本の文化は素晴らしいと感じている学生のイメージを壊さないように、留学中は日本の文化を学ぶことも多かった。また、日本語の先生の代わりに学生の前で授業をしたのは貴重な経験だった。複数の学生の前で授業することは初めてで、スペイン語で教えることも難しかったが、メキシコ人は本当に優しいので助けられながら授業を進めることができた。

● 生活編

メキシコに来たのは2度目であるが、海外で長期滞在したことは初めてであった。私が住んでいたところは長期の教授と学生のための寮であり、コロンビア、ペルー、アルゼンチン、ブラジル、フランス人の留学生と共に住んでいた。男女比は3:2で男の方が少し多かった。一つの寮に6人住むことができ、私のルームメイトはコロンビア人だった。留学生の中で私が唯一のアジア人であり、スペイン語が話せないのは私だけだったので、コミュニケーションを取ることにとても苦労した。しかしラテン人にとって、日本人は珍しかったようで、興味を持ってくれた留学生は、私の面倒を見てくれた。また、様々な手続きも手伝ってくれたおかげでスムーズに終わらせることができた。



図 2: casa6 のメンバー

朝昼晩の食事は寮の近くの食堂でとり、基本的にメキシコの料理が出てきた。メキシコでは日本とは違い、昼食を多く食べる。朝食と夕食は少ないので物足りなくなり、自分で作ることも多々あったが、おかわり自由なのでお腹いっぱい食べることができ、フルーツやお菓子が付いてくるので毎日楽しみにしていた。

ラテン人はパーティなど楽しいことが好きなので、寮の庭でキャンプファイヤーをしたり、メンバーの誕生日をみんなで祝ったりと毎日楽しい日々を過ごした。私も留学期間中に誕生日をむかえた一人である。人生で初めてサプライズをしてくれて、感動のあまり泣

いてしまったのは良い思い出である。

文化の違う人々と生活すると、文化の違いで混乱することも少なからずあった。できるだけより良い生活環境を作るために、みんなで文化の共有をした。日本と真逆に住む国の人たちと一緒に住むことはめったにできないことだと思う。留学生とともに共に過ごした4か月はおかげで忘れられない経験となった。

● 旅行編

私はいつも留学生とともに行動していた。彼らのおかげもあってメキシコ内の色々なところへ行けることができた。

・ メキシコ独立記念日

9月15日、メキシコは独立記念日である。独立記念日とは、1週間前から街はお祭りムードで、私が通っていたチャピング自治大学の中も、遊園地や出店ができるくらい重要な日である。16日は留学生とともにメキシコシティに行った。この日はシティで独立記念日のパレードが行われていた。日本には独立記念日のような国民みんなで祝う行事はあまりないので、新鮮でした。



図:3 独立記念日@メキシコシティ

・ メキシコシティ

メキシコシティはメキシコの首都であり、多くの企業や文化的な建造物が集まっている都市である。休日にはよく行くことが多かった。革命記念塔、ラテンアメリカタワー、チャプルテペック城、ソカロ、国立人類博物館、グアダルルーペ寺院と多くの名所を観光できた。

・ Tolantongo

10月に1泊2日で Torantongo という場所に行った。そこはイダルゴ州の山奥にある秘境スポットで、山の斜面に造られた源泉かけ流しの露天風呂や滝の下で源泉が噴き出す洞窟など世界的にも珍しい温泉郷である。メキシコシティから車で5時間かかった。私たちはそこでキャンプをした。私は海外でキャンプしたことはなかったし、旅行としてメキシコにきても行かないところだと思うので行くことができて良かった。また、大自然の中の星空はとても魅力的だった。しかし、私は帰宅途中に今までに感じたことがないような腹痛を起し、運ばれずに済んだが、人生で初めて救急車に乗った。メキシコでの生活にも慣れた時期での事故だったので、より一層気持ちが引き締まった出来事であった。

・ Dia de los muertos

10/31-11/1 はメキシコで Dia de los muertos (死者の日) で、日本でいうお盆である。私たちは 10 月 31 日に Michuacan という町の中の Patzucaro Pueblo Magico、Janitzio、Tzintzuntzan と 11 月 1 日に映画「リメンバーミー」のモデルの地となった Mixquic に行き、町や墓地の散策をした。死者の日のメキシコの墓地がマリーゴールドなどの花や、ろうそく明かりでカラフルに祀られており、そこが観光地となっていることは、日本のお盆と大きく異な



図 4:死者の日

っていてとても興味深い点であった。観光地の中で特に印象的だった場所は、Janitzio という島である。島までの移動手段は船だった。ホセ・マリア・モレロスというメキシコ独立の偉大な英雄の大きな像が島の頂上に建てられており、島から見た内地は絶景だった。

- ・ ティオティワカン

ティオティワカンとは、ティオティワカン文明の中心となった巨大な宗教都市遺跡でティオティワカン人の宇宙観、宗教観を表す計画的に設計された古代都市であり、世界文化遺産に登録されている。太陽のピラミッドと月のピラミッドが大きな建造物で上から見た景色は絶景だった。



図 5 : ティオティワカン

- ・ ティワカンプエブラ

年末年始はクラスの友達の家を招待され、5泊6日で遊びに行ってきた。彼の家は豆農家を営んでおり、いわゆる地域農村で、メキシコシティからティワカンプエブラの中心街までバスで5時間、中心街から家まで3時間かかった。また標高 2500m の山奥で夜になると流れ星が見られるほど満天の星空が広がっていた。農村のコミュニティは強く、大晦日はその地域に住んでいる人々が集まり、年明けまで踊ったりお酒を飲んだりして楽しんだ。元旦には伝統行事のピニャータを家族と共にやり、充実した6日間を過ごすことができた。



図 6:ティワカンプエブラ

- ・ グアナファト



図:7 グアナファト

2月に Feria de leon が終わった後、日墨協会の方々とグアナファトを観光した。街全体が世界遺産となっており、赤やピンク、黄色といったカラフルな建物が並ぶ街並みは美しかった。ここも映画「リメンバーミー」の「死者の国」のモデルとなったところである。街全体を見渡せるスポットであるピピラ像まではケーブルカーで移動した。メキシコで一番カラフルな街とされるほどキラキラしていた。

- インターンシップ

私は1月から帰国までの一か月間は「社団法人日墨協会」「株式会社ジャパンプラブ」でインターンシップとして受け入れていただいた。

・ Feria de leon

1月5日から2月6日まで、私はFeria de leonのお手伝いをさせていただきました。Feria de leonとは、グアナファトのレオンで行われており、メキシコ各地の食べ物やグアナファトの名産品などが売られていたり、遊園地があったりと大きな祭りだった。私たちはPabellion Japonの中で、ラーメン屋や寿司の揚げ物、唐揚げなどの日本食と日本のお酒を販売



図 8:Felia de leon

した。私の役割は、調理、食材を切ったりする調理補助、レジ、皿洗い、清掃などほぼすべてのことを任せられました。インターンシップを始める前に「お金を払いたくなるような働きをする」という約束事があった。私は飲食で働いた経験が無かったし、スペイン語も拙かったので大変なことが多かったが、何事にもチャレンジしていくうちにだんだんできるようになっていった。その結果、良い働きをしてくれたと評価され、約束を果たせたのでこのインターンシップは、成功だったのではないかと思う。

・ 社団法人日墨協会・株式会社ジャパンプラブ

Feria de leon が終わってから帰国までの1週間は日墨協会でも業務の手伝いをした。日墨協会から起業された「株式会社ジャパンプラブ」の採用の仕事をやらせていただいた。メキシコ人の採用ではなく、日本人の調理師や事務職員を募集した。私が求人票を作り、日本の専門学校や大学にメール送信し、求人サイトに登録するなど、1週間は私の仕事として任せていただいた。日本の企業で初日から重要な仕事を任せられることはめったにないことだと思うし、貴重なことであると感じた。社会に必要なマナーなど少し学ぶことができた。

● おわりに

メキシコ滞在期間は楽しいことより辛いことの方が多くあり、悲観的になることも少なかったが、たくさんの人たちが私を支えてくれたので、何事にも前向きにチャレンジすることができた6か月間であった。右も左も分からない状況でメキシコに行ったので、やはり自分の力だけではどうにもならなかった。たくさんの人々に助けられて生活ができたことは、本当にうれしく思う。何気なくはじまった留学生と生活も、一生忘れられない思い出となった。いつか私を助けてくれた人々に恩返しができるように、留学を目指している人たちにこの経験を繋げていきたいと思う。

● お世話になった方々へ

この度は世界展開力事業の長期派遣学生として選んでいただき、本当にありがとうございました。農業環境科学研究室の教授の方々、2018年度短期留学の時に引率していただいたキム先生、2019年度入江先生、国際協力センターの方々、特にマイさんと酒井さんには大変お世話になりました。今後ともよろしくお願い申し上げます。